

# 日本人ボランティア・チューターの意識調査

深澤のぞみ・岡澤孝雄

## はじめに

金沢大学留学生センター日本語研修コース<sup>1)</sup>では、金沢大学に在籍する日本人学生からボランティア・チューターを募集して、留学生のための日本事情紹介と日本語学習支援を目的とした活動を週1回開催している。これは、学部や学年を問わずに希望する日本人学生が、ボランティア・チューターとして留学生の教室を週1回訪れ、留学生と共に何らかの活動をしたり、話をしたり、あるいは留学生の日本語学習の手伝いをする、という活動である。この活動は、日本語研修コースが初めて開講した平成7年の第1期から現在平成10年の第7期までずっと継続しており、その都度、募集方法や活動内容なども改良しながら、一定の成果を上げてきた<sup>2)</sup>。

しかし、留学生と日本人学生双方にとって、ボランティア・チューターの活動への参加が意味あるものになるためには、まだ改良する点が多く残っている。特に、ボランティア・チューターの日本人学生の積極的な参加と、さまざまな経験の蓄積は欠かせないものであるが、何期にも渡って参加する学生もいれば、すぐにやめてしまう学生もいる。

そこで、本稿では、これまでこの活動に参加した日本人学生に対するアンケートから、どのような学生がどのような動機で参加したか、また、外国人と話すときの日本語に対する考え方などの特徴を調査し、今後のボランティア・チューター活動の運営や指導の指針とするものである。

## I. ボランティア・チューターの活動の概要

まずはじめに、ボランティア・チューターの活動の目的について述べ、次に、対象となった留学生の属性について簡単に示す。その後で、日本語研修コースにおけるボランティア・チューターの活動の概要について述べるが、前述したように、第1期から現在の7期に至るまで、募集方法や活動内容には多少の違いがある。その点にも触れながら、各期ごとの概要についても簡単に述べていく。なお、今回の調査では第6期までの結果を使用するので、活動の概要も第6期までのものを取り上げる。

## 1. ボランティア・チューターの活動の目的

日本語研修コースに在籍する留学生は、それぞれの受け入れ大学に配属されるまでは、毎日1限から4限まで、6か月間に渡ってずっと日本語の授業に出席しなければならない。その間顔を合わせるのには、日本語教師と留学生仲間、そして留学生課の担当者だけという状態であり、日本人と付き合いたいと思っても、研究室や授業で出会うということもない。またそのような状況では、せっかく授業で習った日本語を使ってみるための機会がないということになる。翻って、日本人学生にとっては、留学生と話してみたいと思っても、なかなかそういったチャンスが少ない。

そこで、日本語研修コースでは、留学生と日本人学生が交流する場を設けており、それがこのボランティア・チューターの活動である。この活動の目的は、先に述べたように、留学生に対しては、じかに日本事情を知ったり日本語を使うための機会を提供するということである。一方、日本人学生に対しては、留学生と知り合ったり、諸外国の情報を得たりする機会を提供するだけでなく、日頃母語として何気なく話している日本語を客観的に見たり、また、語学教師を目指す学生には留学生の前に立つ機会を与える、という目的もある。

## 2. 対象となる留学生の属性

ボランティア・チューターの活動の対象となる留学生は、日本語研修コースに在籍する国費留学生で、日本語学習の経験があまりない学生が中心となっている。

1期から6期まで、対象となった留学生は5, 9, 9, 15, 18, 9名、計55名であった。次に、留学生の性別や年齢などの属性について、表1に示した。

表1 留学生の属性

性別	年齢	留学生の種類	専門分野
男性 37人 (67.3%)	平均 28.9歳	研究留学生 37人 (67.3%)	文系 19人 (34.5%) 理系 33人 (60.0%)
女性 18人 (32.7%)	(21歳から 35歳まで)	教員研修生 18人 (32.7%)	その他 (芸術系や体育系など) 3人 (5.5%)
合計 55人			

まず、性別では、男性が37名(67.3%)と、女性に比べて多い。また年齢は、21歳から35歳までで、平均28.9歳であった。

日本語研修コースに在籍する留学生は、大学院などでの研究を目的とする研究留学生と、自国ですでに現役の教員である留学生が、日本の大学で学校教育について研究を行うことを目的とする教員研修生に分れる。この研究留学生と教員研修生の内訳は、研究留学生が37名(67.3%)、教員研修生が18名(32.7%)である。これは留学生のうち、少なくとも約3分の1が、自国では教員であるということになる。

また、留学生の専門分野では、工学などの理系の学生が60%を占めており、文系は34.5%にとどまっていることがわかる。文系の中では、法学や経済学、国際関係学といった分野が大半を占めている。

次に、国籍の地域別の分布を表2に示す。

**表2 留学生の国籍** (人)

アジア	オセアニア	北米	中南米	西欧	東欧	中近東	アフリカ	合計
31 (56.4%)	2 (3.6%)	0	9 (16.4%)	1 (1.8%)	3 (5.5%)	6 (10.9%)	3 (5.5%)	55

アジアの留学生が55名中31名(56.4%)と多く、次に中南米の学生が9名(16.4%)と続いている。アジアの留学生の国籍は、タイ、インドネシア、フィリピンなどが多い。

### 3. 各期ごとのボランティア・チューターの募集方法と活動の内容

ここでは、活動の概要について、各期ごとに述べていく。

#### (1) 第1期(1995年10月～1996年3月)

募集：口コミで言語学などを専攻する学生に依頼するという方法を取った。

内容：主に日本語学習に遅れがある留学生を中心に、学習した日本語項目の復習や宿題を個人指導したり、話し相手になるという形をとった。

#### (2) 第2期(1996年4月～1996年9月)

募集：口コミの他、学内と学生寮の数箇所にもポスターを貼った。

内容：日本人学生の交流の時間と個人指導の時間の両方を行った。交流の時間には、自己紹介を行った後、日本人学生がゲーム(ひらがなのかるたなど)や歌などを指導した。個人指導の時間は、週3回ほど、毎日の授業が終了したあとに、適宜、留学生の宿題を手伝ったり、話し相手になるという活動を行った。

(3) 第3期 (1996年10月～1997年3月)

募集：特に新たな募集を行わず、1期や2期からの継続の学生や、口コミで参加を希望した学生を中心に活動をした。

内容：これまでの教師主導の活動をやめて、日本語教師を目指す学生が中心となって、ゲーム(ひらがなのかるたや折り紙、伝言ゲームなど)や歌、日本語教科書の音読の指導を行った。

(4) 第4期 (1997年4月～1997年9月)

募集：学内や学生寮にポスターを掲示した他に、口コミなどでも参加学生を募集した。これまでに参加していた学生で継続した学生も数名いた。

内容：参加学生の中から企画係を募り、その学生たちを中心に、折り紙、早口言葉、伝言ゲーム、歌などの活動を行った。企画を担当した学生に対しては、活動の前後に担当の日本語教師が指導を行った。

(5) 第5期 (1997年10月～1998年3月)

募集：ポスター掲示の他に、第4期に登録した学生を中心に案内状を送付したり、「日本事情」「日本語教授法」を担当している教官に依頼して、募集を行った。

内容：第4期と同様、企画係の学生を決めて、活動案を考えた。担当の教師の指導に加えて、月1回、日本人ボランティア・チューターと担当教師のミーティングを設け、問題点や新しい企画案などの話し合いをした。その話し合いの中から、「Show and Tell」方式で、日本人学生、留学生がそれぞれ自分の国について短いスピーチをする活動案などが、新たに始まった。また担当教師が、日本人学生に対して、留学生に伝わりやすい日本語についてや、具体的な問題点の事例について、指導を行った。

(6) 第6期 (1998年4月～1998年9月)

募集：第5期と同様、ポスター掲示の他に、これまで登録していた学生に案内状を送付したり、「日本事情」「日本語教授法」を担当している教官に依頼して、募集を行った。

内容：参加している日本人学生に二人ぐらいのグループを作らせ、各グループで交替で活動を担当することにした。具体的には、折り紙、地名ゲーム、ジェスチャーゲーム、漢字神経衰弱、七夕、などを行った。また日本人学生と担当教師のミーティングも、月1回程度の割合で行い、活動案についての反省や新しい案などについて話し合った。































